

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00246

研究課題名(和文)1976年から改革開放政策時期までの中国における職業演奏家の研究

研究課題名(英文)A Study of Professional musician in China from the 1976 to the Reform and Opening Policy Period

研究代表者

長内 優美子 (OSANAI, Yumiko)

立命館大学・言語教育推進機構・非常勤講師

研究者番号：80645036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：2018年度は北京で対面聞き取りを実施した。2019年度は立命館大学経済学セミナーで研究発表を行い、論文を公開した。2020年度から2022年度までは新型コロナ対策の出入国制限のため代替的にオンラインインタビューを行い、また下記の研究に取り組んだ。1、中国オーケストラの経営実態について研究会で検討した。2、中国への中古楽器輸出について日本の企業にヒアリングを行った。3、コロナ期間のオーケストラの活動について中国の動画サイトの反応コメントを調査した。4、楽器店のSNSレッスンについて調査した。5、作曲家王シンの資料を収集し伝記作成を準備した。6、在日中国人演奏家に対面インタビューを実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国の管弦楽団やそれに所属する職業演奏家は、1960年代音楽活動が制限された困難な時期から改革開放政策を経過しわずか数十年で今日のような活況を呈するまでに発展した。本研究は主には、この急速な回復と成長の経緯を解明するためにインタビューを通じて著書や公的記録に残されていないナラティブを採集するものであるが、この成果は文化史研究や非営利組織マネジメント研究などにおいてより大きな枠組みで実証的研究をまとめる際に参照され得るであろう。コロナ下での楽団経営の調査は当初の目的に含まれていなかったが、中国の音楽産業が新状況に即応する態勢を観察し、当初目的を補完する意義があったと言えるだろう。

研究成果の概要(英文)：In FY 2018, I conducted face-to-face interviews in Beijing; in FY 2019, I presented my research at the Ritsumeikan University Economics Seminar and published my paper; from FY 2020 to FY 2022, I conducted online interviews as an alternative due to immigration restrictions for the COVID-19 border measures and also engaged in the following research; 1, I hosted a study group on the management situation of Chinese orchestras and examined the management situation of Chinese orchestras.; 2, I have interviewed Japanese companies regarding the export of used musical instruments to China.; 3, I have investigated reaction comments on Chinese video sites about the orchestra's activities during the COVID-19 period.; 4, I have investigated social networking lessons by music stores.; 5, I collected materials on the composer Wang Xin and prepared to write his biography.; 6, I conducted face-to-face interviews with Chinese musicians in Japan.

研究分野：中国文化

キーワード：中国 改革開放政策 オーケストラ ピアニスト 職業音楽家

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中国の管弦楽団やそれに所属する職業演奏家は、1960年代音楽活動が制限された困難な時期から改革開放政策を経過しわずか数十年で今日のような活況を呈するまでに発展したが、その要因は今日までに十分解明されているとは言えない。またこれらを経験した当事者はすでに高齢化が進んでおり、彼らの証言を収集するにはそれほど時間の余裕が残されていない。こうした背景から本研究は音楽家の口述を採集し、楽団運営や演奏活動、また教育活動に関する証言を記録するために開始された。

2. 研究の目的

著書や公的記録に残されていない演奏家の活動について、当事者自身の言葉で語られるナラティブを採集することによって、この時代の文化史研究または非営利組織のマネジメント研究において参照可能なインタビュー集を作成することを主目的とした。また文献資料を収集し、関係者の年表や伝記を作成することを副目的とした。

3. 研究の方法

研究開始当時は今日のようにオンラインインタビューが一般的ではなかった。また対面での会話によって語られる詳細な情報を可能な限り収集するために、対面調査を第一として研究を計画した。しかしCOVID-19の影響で研究期間の途中で対面調査が実施できなくなり、代替的にオンラインインタビューを行った。これにより調査対象を一部変更することを余儀なくされた。日本で活動する中国人演奏者に対面調査を行ったほか、コロナ下で中国の楽団がどのように聴衆との双方向的関係を維持し演奏活動を公開するか等に対象を拡大して調査した。

4. 研究成果

(1) 2018年度は当初の計画に沿って、改革開放時期の北京における楽団マネジメント改革についての質的研究を行った。具体的には中央楽団の解散から国家交響楽団の設立、その運営について、実態と評価についてのインタビューを4名に対して実施し、文献資料と比較対照した。4名の対象者は次の通りである。1. 中国音楽家協会元副主席、中央楽団社会音楽学院副院長、ピアニスト鮑蕙菁氏。2. 国家一級演奏員、西安音楽学院客員教授、音楽評論家、ヴィオラ奏者景作人氏。3. 中国交響楽団国家級バイオリン独奏者、盛中国氏。4. 上海音楽学院元教授、中央音楽学院教授、ピアニスト呉迎氏。彼女/彼らにおいて当該時期の状況と楽団マネジメントの詳細、および今日それらを振り返っての評価についての見解を聴取した。4件のインタビューにおいては共通して、国家交響楽団設立当初における一年間の有期雇用、毎年の選抜試験によって正規メンバーを登録するといった急激な改革が、楽団運営にどのように影響したか、また楽団の音楽性をどのように変化させたかについて詳細を聴取した。採録したインタビュー音声の文字起こしと聴取内容の分析、および文献資料の収集と比較対照を行い、報告執筆のための準備を行った。なお、対象者の盛中国氏は、本研究の計画立案当時から体調がすぐれなかったが、特に配慮してこの調査に応じてくださった。訪問調査実施からわずか一月あまりのち、薬石効なく逝去された。ここに謹んで氏のご冥福を祈るとともに、本研究の喫緊性について再認識に至ったことを記したい。

(2) 2019年度は、当初の計画に沿って、改革開放時期の北京における楽団マネジメント改革についての質的研究を行った。具体的には中央楽団の解散から国家交響楽団の設立、その運営について、2018年度に実施した4名のインタビューを資料と比較対照した分析を行い、立命館大学経済学会セミナーにおいて口頭発表を行い、参加者から指摘やコメントを受けた。それをもとに「立命館経済学」に論文「改革開放政策時期における北京のオーケストラ運営」を公表し、成果を公開した。

当初計画においては、2019年度は以下3点の調査研究を予定していた。北京において石叔誠氏など中央楽団関係者数人を対象にインタビューを実施すること。香港・深センに拠点をおく音楽教育者、研究者を対象としてインタビューを実施し、本研究の実施状況について討論し検討と点検を行うこと。文献・録音・映像資料調査。しかしながら、の訪問調査は外的要因のため計画通りに進めることができなかった。は2月の春期休暇期間を予定していたが、COVID-19感染拡大防止措置により出入国が制限されたこと、訪問先の大学と楽団が封鎖されたこと等により、訪中することができなかった。そのためウェブサービスやSNSを通じて若干の聞

き取りを行った。また は、2019年6月以降における香港空港および市街地中心部の交通機能の麻痺、治安状況の悪化、大学の混乱等の影響により、中止するほかなかった。 は計画通り実施した。

(3) 2020年度の成果について。 改革開放期に中国国内で演奏・教育活動を展開した演奏者へのインタビューを実施した。当初計画では一昨年度から引き続き直接訪問する予定だったが、COVID-19 防疫措置による入国制限により実現できなかった。このため、オンラインのメッセージアプリケーションと通話などによって聞き取り・対話を行った。鮑蕙菁氏、景作人氏などへの聴取を通じて、対象者が若年期に受けた音楽教育と、今日の中国で一般的になっている教育方針とを比較検討した。また、近年の傾向として欧州に留学する学生たちへの指導方法、育成方針について聞き取りを行った。 改革開放期以後に中国に移住し、外国人として活動した演奏者へのインタビューを行った。 文献資料の収集。改革開放期とその前段階の60～70年代の公演活動について、中国の音楽雑誌記事や学術論文などを中心に収集、翻訳した。これらの調査を通じて、改革開放期に活躍した音楽家を指導した作曲家である王莘の役割に注目し、伝記的資料を収集した。

(4) 2021年は、COVID-19の影響の長期化が避けられない状況を考え、当初計画 から に を追加して実施した。 昨年度に続いて景作人氏などから、改革開放期の演奏活動について、また現在の高校生大学生への音楽教育について及びその評価について聴取した。中国から欧米の教育機関に留学する学生が多い現状において、国内と留学先との教育のギャップについてなどを重点的に聴取した。 日本で演奏活動している中国人音楽家、フルート奏者田呈媛氏に対面でインタビューを行った。このとき京都市立芸術大学の大嶋義実教授の同席を得て、留学生を指導する日本の教育者の観点を聴取することができた。田氏とは対面取材のあとオンライン取材を継続し、より実感のある口述を収集することができた。 関連する文献資料を収集・分析した。改革開放期とその前段階の60～70年代の公演活動について、森岡葉氏よりCD・DVD・書籍などの寄贈をうけ、これらを通じて口述取材の精度を向上させた。また平行して作曲家王莘の活動について調査し、伝記編集を準備した。 中国に楽器を輸出する日本企業に取材を行い、中国市場の需要の現状、そこから伺える一般音楽市場の消費動向について知見を得た。

(5) 2022年度はオーケストラマネジメント研究会を実施し、日本の研究者と検討会を行った。また前年度に続いて楽器輸出業を訪問調査し、対中輸出業務について聴取した。またコロナ下で公演活動が制限された中国のオーケストラの活動観察として、公式アカウントが動画サイトに公開した演奏に聴衆がどのように反応しているかを調査した。中国の楽器店が SNS でオンラインレッスンを実施している様子を調査した。また前年度までの成果を公開するために原稿の作成、出版準備を進めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 長内優美子	4. 巻 第68巻
2. 論文標題 改革開放政策時期における北京のオーケストラ運営	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館経済学	6. 最初と最後の頁 64-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00012836	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長内優美子
2. 発表標題 改革・開放後の北京におけるオーケストラの新しい展開について
3. 学会等名 立命館大学経済学会セミナー
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

中国オーケストラマネジメントに関する検討会、2022年7月10日、立命館大学大阪いばらきキャンパスにて。
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------